

---

# **建国者**

ロースト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

建国者

### 【著者名】

ロースト

N2986M

### 【あらすじ】

殺人罪は重いものです。それをよく肝に銘じておかなければ、こんなことになってしまいますよ……？

## 建国者

「ここは、私の国です。」

そう言つた少女の言葉は妙に軽やかで、違和感があった。

「この国には法律が2つしかありません。それさえ守つてくれれば、この国では何もかもが自由で制限なく暮らします。」

その言葉に隠された本当の意味を私は理解できていなかつた。そう、そのときはなんとも思わなかつた。自由ということはどういうことか、深く考えなかつた。

「一つ、私の言葉を尊重してください。これは、尊重ですから、必ずではありません。私の言葉は命令ではなく、アドバイスです。」

彼女の言つた言葉の意味も考えず、単純に受け取つてしまつた。

「一つ、この国では人を一人殺すことが出来ます。ですが、2人目はダメです。」

その言葉に潜む陰を、私は聞き逃してしまつたのだ。」 では、

この国では、人を殺すことを許容しているのですか。」

そう、尋ねた。そのときは何の疑惑もなく、それはただの確認作業だつた。

「許容、とは少し違いますね。なんというか、しじうがない、というような感覚です。人は皆、何かを殺すでしょう？ 食べ物を食べるためにも、服を着るためにも、家に住むにしても、何かしらを殺している。」

確かに、少女の言つとおりだ。人は何かしらを殺している。かく言う自分もそういうことをよくする。生活をするならばそれは日常茶飯事であるのだが。

「だから、許容とは少し違いますが、法律で定めているのです。」

そういうて、少女と僕の対談は終わりを告げた。国を出るとき挨拶

はいらない。そうだし、この少女と会つ」ともわざわざ会おうとした  
ければ、一度とお由にかけないだらう。そう、思つていた。少女は  
私の背に由をやり、

「あなたは恐らしく、この国を一生出られないでしよう。」

そう、一言発したのだ。そのときの私はその言葉など聞かなかつた  
かのように、ひたすらに平静で受け流した。

「あなたは、人を殺しましたね？」

温度が急に下がつた気がした。その声は前聞いたときと大差ない。  
少女が発した言葉に動搖したわけではない。彼女の声に、表情に、  
震え上がつた。どこまでも少女は優雅であり続けた。ここは経つた  
今、人が殺されたというのに。ここは乾いていない血で濡れた殺人  
現場だというのに。

「な、なぜ・・・」

自分の声は震えていた。無様にも、自分よりもずいぶん年下の華奢  
な少女に対しても恐れをなしていたのだ。少しでも離れようとあとず  
さる。

「あなたは、やつてはならないことをしました。あなたの犯した殺  
人について、抗議が出ています。よつて、あなたは死ぬことは許さ  
れないのです。」

「――――――――――」

言いながら足をこちらに一步踏み出す。たつたそれだけの動作で悲  
鳴を上げそになつた。正確には悲鳴を出そうにも、恐怖心の方が  
勝り、出なかつただけである。

「私はちゃんと最初に言いましたでしょ・・・この国では、人は一人  
しか、殺せないと。」

その言葉はゆっくりと、優雅さえ引き連れながら吐き出された。  
そう、どこまでも優雅に言つている。睨み付けられているわけでも、  
感情をぶつけられても、殴られているわけでもなく、本当になんでも  
ない言葉。なのに、恐怖感がさらに搔き立てられる。

「人は皆、自分を殺すことしか、出来ないのですよ。」

「

その言葉に対して自分は何もいうことができない。恐怖はすでにはい。というより、通り過ぎてしまった。ただ、ぼんやりと他人事のように少女の言葉に対してもう一つことだつたのか、と納得するだけである。人形のようにただじつと話を聞くだけ。

「唯一の例外は、他の国民に迷惑をかけていないこと。ただそれだけですよ。抗議が出さえしなければいいのです。抗議が出ない。つまり、その人はいてもいなくても変わらない。それは空氣と同じでしよう? 人、じゃ、ありませんわ。」

言葉は脳に届かず、意味を持たずに耳から耳へと出て行っている。それを承知で少女はなおも言葉を紡ぐ。理解は私に求められている。

い。

「私の言葉はアドバイス。助言であり、忠告もある。」

「予想通りよ。この人はこの国から出られなかつた。」

少女は虚空に対して、ただつまらなそうに言つ。それはそう、何度もこんなことを繰り返していて、飽きてているかのような素振りだった。

「人は、自分しか殺してはいけない。でもね、死なない程度の暴力と加虐は認可しているの。あなたはこれから、ずっと、虐められ続けるのよ。」

まるで、わけがわからない子供に物事を教えるかのような言い方だつた。いや、まるで、ではなく、そう、なのだ。自由という意味を、教わつた、無様な子供だったのだ、私は。

「加虐に意味は無い。だつて、あなたは罪人ですもの。罪人は大人しく、罪を償つていればいいの。」

そう言って、私に初めて、笑顔を見せた。綺麗な、美しい、大人の微笑だつた。そして、それはまさしく、加害者の、加虐者の、狂つ

た微笑としか言いようのないものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2986m/>

---

建国者

2010年10月26日07時25分発行